

地元の高校生が我が地域の新たな魅力を発見し、高校生目線のユニークで新しい情報を発信いたします。

災害発生時における高校生の役割

鹿児島県立種子島中央高等学校
普通科 三年 鮫島 彩菜
高磯 南海

01 高校生の役割



はじめに

日本は「災害大国」と呼ばれており、一九九五年には阪神淡路大震災、二〇一一年には東日本大震災など大規模災害が起きています。その後も、毎年のように日本各地で災害は起きており、いつ、どこで、どんな災害が起きてもおかしくない。にも関わらず、私たちは災害をどこか人ごとのように感じている気がする。しかし、このような意識のままではいいのだろうか。もし、私たちの暮らす種子島で災害が起きた時、種子島はどうなってしまうのか。危機感を覚えた私たちは、災害時に私たち高校生にできることは何かについて、災害の起きていない今こそ考えておく必要があると考え、インターネットや町の防災マップを使い防災について調べてみた。さらに、地域の保健師さんや高校の養護教諭に質問をして、災害発生時における高校生の役割について考えを深めた。

(1) 発生前
一般的に求められている、災害時高校生に求められていること、高校生ができることについて調べたこと、聞いたことを災害発生前、発生時、発生後に分けてまとめた。

災害発生前に高校生ができることは、まずは災害に対する知識を備えることである。災害には地震、津波、火災、洪水など様々な種類がある。それぞれの災害がどのようなメカニズムで起きるのかわかることは、どのように避難すればよいか、どこに避難すればよいかを考えるに当たり非常に重要となる。また、避難場所と避難経路の確認が欠かせないことは言うまでもない。

(2) 発生時
次に、災害発生前から高校生ボランティアグループを作っておくことが挙げられる。高校生の持つ「若さ・元気・フレッシュさ」が避難場所の暗く、重い雰囲気や狭い通路の妨げにならない。また、災害発生時に懸念される人手不足や、それに伴う対応の遅れも、事前にボランティアグループができていれば解消できるだろう。

(3) 発生後
災害発生時に最も大切なことは、自身の命を自分で守ることだ。そのためにも、日頃の避難訓練をしっかりと受けておく必要がある。学校の時間帯に災害が起きた時は、学校の指示に従って避難するが、そうでない場合は地域の大人や防災無線に従って迅速に避難しなければならぬ。その際、体力のある高校生は率先して高齢者や幼児、障害者や妊婦などの避難を手助けする必要がある。私たち高校生は、自分の身を自分で守ることはもちろんだが、周りの人も助けられるような人材であるべきだ。

災害発生後に高校生にできることは、高校生の体力や機動力を活かした活動だと思ふ。例えば、避難所の環境づくりや、避難所の清掃などだ。また、避難所の人々のメンタルケアも重要だ。災害発生直後の人々は、恐怖や不安を感じることで心に負担を感じ、精神に深い傷を負ってしまう。ストレス反応の極端な状態をいう「PTSD」だけでなく、被災者全員が何らかの不安を感じている。その中には、もちろん自分たちも含まれるのだが、高校生が高齢者や子どもたちに話しかけ、不安を共有するだけでも人々の心の不安は少しは軽くなるのではないだろうか。

02 種子島での災害発生時における高校生の役割

前項で、災害時に高校生に求められる一般的な役割について述べたが、次に種子島で災害が起きた際の高校生の役割について具体的に考えてみることにした。

まずは、種子島の強みと弱みについて考えてみる。種子島の強みは、何と言っても地域コミュニティが密であることだ。学校帰り、歩いていると地域の顔見知りのおじさんやおばさんが「お帰り」と声をかけてくれる。地域行事も盛んで、年間を通して運動会や綱引き、相撲大会、敬老会、駅伝大会など地域の人々が集う機会も多く、お互いの情報を共有している。また、私たちの通う高校は、島内の中学校から進学する生徒で構成されており、中種子中学校と南種子中学校出身者が全校生徒の9割以上を占める。そのため、同じ学年だけでなく、上級生や下級生も幼い頃からの知り合いばかりで、どこに住んでいるか、兄弟は何人かなどもお互いに把握している。このような、地域コミュニティが密であり、情報共有が自然とできていることは、災害発生時には大きな強みになるはずだ。

次に、種子島の弱みについて考えてみる。種子島の弱みは、まず第一に離島であるということだ。災害時に海が荒れていたらフェリーが欠航になり、支援物資が届かなくなる可能性がある。また、災害救助のためのボランティアもすぐには島には来られないだろう。さらに、医療従事者の数が少ないことも弱みの一つだ。島内に大きな病院は少なく、施設も十分だとは言えない。また、一人暮らしの高齢者や、自力で避難所に避難できない高齢者も多い。

これらのことを踏まえ、第1項で述べた災害発生時における高校生の役割の中で、種子島で災害が起きた時にどの役割が求められるかを検証した。

発生前	災害への知識を備える。	◎	自分自身を守るためにも、地域の人を守るためにも知識を備えることは大前提。
	高校生ボランティアグループを作る。	◎	有志ボランティアではなく、本校の特長を活かした組織づくりが可能。
発生時	高齢者や幼児などの誘導	○	まずは自身の避難が第一。避難中に見かけた高齢者や幼児を誘導することは可能。
発生後	避難所の環境づくりや清掃	◎	体力を必要とする仕事は高校生が担うべき。
	メンタルケア	△	地域コミュニティが密であるため、避難所で孤独を感じる人は少ない。

03 種子島の高校生ができること

まず考えたのが、災害時に高齢者を高校生が誘導するということだ。一人で避難できない高齢者を高校生が迎えに行き、避難を誘導するのはどうかと考えたのだ。そのことを役場の防災課の方と話すと、高校生はまずは自分の命を自分で守ることをしてほしい、と言われた。私たちは自分の命を守るだけではなく、災害発生時に人の命も守れるようになりたいと考えていたのだが、大人の目から見ると、私たち高校生も守られるべき存在であり、だからこそ自助能力を高めることが結果として地域のためになるのだ。

しかし、災害発生前に準備しておくことはできるはずだ。直接高齢者を災害発生時に誘導はできなくても、消防署員の方や地域の大人たちが高齢者をスムーズに誘導するために事前にできることはないか。そこで考えたのが「高校生で組織する防災チームの結成」である。各避難所ごとに分かれてチームを結成し、それぞれのチームで活動を行う。この防災チームは、限られたエリア出身の生徒で構成されている種子島中央高等学校だからこそできる組織である。

主な活動として、種子島の強みである密なコミュニティを活かした、各避難所ごとの高齢者マップの作成を提案したい。高齢者マップには、独居であるかどうか、自力で歩けるかどうかなどの情報も入れておく。そのマップがあれば、避難所に来ていない高齢者がどこに住んでいる誰なのかが分かるので、救助の際の人員把握に役立つ。また、災害発生時の役割分担を、各防災チームごとで事前に決めておく、災害時には避難所の環境作りや清掃などを担う。生徒全員がどこかの防災チームに属し、地域の防災リーダーになることで、自助能力も上がり、防災意識も高まるのではないが。



今回は、災害発生時における高校生の役割として、一般的に求められている役割を調べた上で、種子島という特定の場で求められる役割と、種子島だからこそできる取組について考えた。実際に「高校生で組織する防災チーム」や「高齢者マップ」が実現・実用可能なものなのかはこれから検証しなければならぬ。今、私たちは試しに自分たちの集落での高齢者マップづくりをしている。実際に作ってみることで新たな課題も出てくると思う。今はまだ結果は出ていないが、これから継続して取り組み、形あるものに仕上げたいと思う。

